

---

# 日のあたる世界の中で

シャカリキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日のあたる世界の中で

### 【Nコード】

N18360

### 【作者名】

シャカリキ

### 【あらすじ】

文章表現などがおかしいところなどがあります。作者は書くの下手ですので指摘いただけるとうれしいです。

魔術師の最高峰が集う学び舎、時計塔。そこに通うある青年と少女の物語。二人はとある目的の人物を探してあちらこちらと走り回りますが……。型月の世界観を借りますので、いろいろな人たちと絡むかもしれないです。赤い悪魔とか、魔法使いとか…。

## days. 0—prologue

「悪いね、Requiescat in Pace——」

目の前には、今まさにその生を終えようとする一人の人間がいる。  
自分の犯した罪のことは棚に上げて、命乞いをするその姿はあまりにも無様。

救いなどない、救われるはずがない、そのことに気付くことはない  
のであろう。

自分の叶えたいことの為に、関係のない人、ものを犠牲にしてきた  
魔術師彼は。

彼に関わらず、得てして魔術師というものは大なり小なり自分勝手に  
に生きているものだが、それでも超えてはいけない一線というものは  
ある。

それを超えてしまい、協会から排除命令を出されたのが彼だった。  
と、そんなことを考えているうちに、彼はいつの間にか気を失って  
いた。

おそらく出血のしすぎで意識を保てなくなったのだろう。

さて、何はともあれこれで仕事は終わった。  
害虫駆除

このまま放っておけば彼は時機に死ぬだろう。

なにせここは、ロンドンでも有名な幽霊屋敷。  
ホラーハウス

さらには彼が念入りに仕掛けた結界が張られているようだから、数  
日は見つかりはしない。

死体処理係

そのうちに協会の専門家が証拠を隠滅することだろう。

これで世界はいつも通り、万々何事もなく回り続ける。

そしてまた——

「おーい……聞いているの？　もしかして立ったまま寝ていてっ」

「……寝てない」

「わかった！ わかったから手離して！ いたたたたっ」

せつかく私が世界について考察を始めようとしていたところだと言うのに、マキがそれを遮った。

呆れたような顔をしていたから頬をつねってやったが、それは自業自得だと思う。

たっぷりと気が済むまで続けていたけど、いい加減怒りそうだから離すことにする。

「ううう……たく、なんなのさいきなり」

「……自業自得」

「意味わからないから……はあ、とりあえず仕事は終わったから帰るよ。何か気になることとかはないよね？」

「……ない」

「それじゃ帰ろうか」

帰ろうかと歩き出すマキに、無言でコクッと頷いてついて行く。

外に出ると、いつの間にか日が昇っていたのか、少し肌寒かった。

「今回も奴じゃなかったね」

「……そうね」

歩きながらマキが呟いた言葉。

それは私たちにとって重要なこと。

今回の依頼内容は、可能性が高かったただけになんとも言えない空気になる。

でも、そんなことは私には関係ない。

「……でも、諦めるわけにはいかないの、絶対に」

「そう、だね。うん、そうだ。まあこんなのはいつものことだしね、また探そうか、リーナ」

そう私に話しかけるマキの顔は、花が咲くような笑顔で……私は俯いて頷くことしかできなかった。

「？ 何はともあれ帰ろうか——時計塔学び舎に」

不思議そうにこっちを見ていたマキだが、とくに問題はないと判断したのかまた歩きはじめた。

その態度に少しムカつとするが、私は何も言わずに後を追う。

この朴念仁には言ったところで意味などないのだから。

そして、そしてまた世はこともなく回り始める。

予定調和の流れのままに。

## **days. 1 時計塔（前書き）**

亀足速度の更新になるかもしれないですが、読んでもらえるとうれしいです。

## days. 1 時計塔

### 『時計塔』

表向きはただの博物館（というか大英博物館）であるが、その本質はまったく別のところにある。

### 『魔術協会』

魔術師達の自衛団体のことであり、外敵に対する武力を持ち、魔術の研究機関を持ち、魔術師による犯罪を抑制する法を敷いている。よって一般社会で魔術がらみの事件を起こした者を処罰するという面を持つ。

しかし処罰と言っても、平たく言えば処刑であり、それは外部に魔術という神秘が漏れないようするという為である。

そこには、正義や道德などという概念は存在しない。

さて、なぜ魔術協会について話をしたのか、というとそれは最初の時計塔の話に繋がってくる。

表向きは、と言った通り時計塔には違う側面がある。

それこそが、魔術協会の総本山という姿だ。（細かく言えばロンドンの協会の別名なのだが、それは今は置いておくとする）

ではなぜ大英博物館という一般人が多数来るような場所に総本山を置いたのか。

当然の疑問であるだろうが、これは博物館、しかも世界有数の、というのが肝だったりする。

つまりは、世界から集まる美術品、絵画、骨董品、上げればきりがないだろうが、それらが問題なのだ。

世界中から集まるそういった品の中には、<sup>アーティファクト</sup>当然魔術に関係したのも多く含まれる。

その管理を容易に行うため、また博物館という点から警備を厳しくしても怪しまれないというのもあるだろう。

お偉いさん方の考えとしては、手元に奪われたくない品を置きつつ、魔術師を管理したいって感じじゃないだろうか。

「まあ、僕にはどうでもいいことだけど」

「……？」

「ん？ ああ、ちょっと考えごとをね。気にしないでいいよ」

コクつと頷き、目の前の獲物<sup>クッキー</sup>に意識を戻したのは、リーナ・サン  
グイネア。

今は午後のティータイムといったところであり、時計塔から少し離れた路地裏にあるカフェで遅めの昼食をとっている最中だ。

そしてここは、所謂穴場というやつであり人通りが少ない上に低価格、美味という僕らお気に入りの場所だったりする。

人で賑わいそうな時間帯だというのに僕らと他には二組しかいないことがそれを裏付けるだろう。

「リーナ、おいしい？」

「……ん」

クッキーを頬張りながらコクつと頷く。

彼女の前に置いてあるお皿の上には、まだまだクッキーが積み重ねており食べきるのももう少し時間がかかるだろう。

久しぶりのここでの食事だし、リーナが張り切っているのも仕方がないだろう。

ここ最近は、ある事件を追いかけていたためにここへ来れなかつ



たし、何より碌に食事もとれない環境だったせいでおいしいものに飢えているのだ。

とくに甘いものに。

まあそれは置いとくとしても、昨日その事件を解決して漸く人心地ついているってわけだ。

もうちょっとしたらそのことについて報告をしに、時計塔の教授のもとへ行かなければならないが、今くらいはゆっくりとリーナと過ごしていたって悪くはないだろう。

そんなことを考えながら、ふとリーナのほうを見してみる。

と、リーナもこっちを見ていたようで目があつたのだが、すぐに逸らされてしまった。

はて、僕今何かしたかな。

もしや今の一瞬でリーナに何かをしてしまったのではないかと考え始めた僕の目の前に、急にクッキーが現れた。

もちろんクッキーが勝手に動き出して、宙に浮き、僕の目の前にあるってわけではなく、リーナが右手に持ったクッキーを突き出しているのだが。

不思議に思った僕は聞いてみる。

「どうし——」

「……あげる」

——たのって、くれるの?」

言葉の途中でリーナに遮られたが、どうやら僕にクッキーをくれるらしい。

確認したらいつものように無言でコクッと頷いて、さらにクッキ

ーを突き出してくるし。

というかりーナさん、もう口開いたら入りそうな位置にあるのですが。

そんな考えが浮かぶ僕に気付いているのか、はたまた気付いていながらも無視をしているのか。

おそらくは後者であろうと思いつながらも、くれるというのだからおとなしくもらおうと手を伸ばす。

だが。

スー。

さっ。

おかしい、なぜか手を出した分だけクッキーが僕の口から離れていく。

……あれ？

クイ、クイ、ククイっ。

さっ、さっ、ささっ。

試しにと思って右、左、後ろへと手を動かしてみたら、クッキーリーナの手も同じ距離を保って逃げる。

「あの……リーナさん？ それじゃ食べられないんだけど」

「……んっ」

これじゃ埒があかないのでリーナに聞いてみると、答えとしてクッキーが口の前に突き出された。

さすがにここまでやられれば僕でも気付く。  
つまりリーナは、僕に対して親鳥が雛に餌をあげるようにしたいのだろう。

やれやれ、どうしてもたまにこんなことするんだろ。

いままでも、何かの拍子によくこんな風にリーナが僕にぁーんをさせようとする事があった。

そのすべてがどうしてそうなったのかはわからないのだが、ただ一つわかるのはこれを無理にでも断ると三日は口を利いてくれなくなるということ。

「……どうしてもそのまま？」

「……ん」

半分以上諦めながらも最終確認をリーナにしてみる。

案の定リーナは無表情ながらも硬い意思を持った目で僕の言葉に頷いた。

まあ、いいか。別に嫌じゃないし。

「――別に嫌じゃないし」

「……っ」

心の中で納得し、リーナのほうへと顔を向けてみると、そこにはなぜか顔をトマトのように赤くしているリーナがいた。

「どしたの？　なんかあった？」

「……んん」

何かあったのかと聞いてみても、首をぶんぶんと横に振るだけで、答えはない。

というか、そんなに力強く首振らなくても。

それと経験上、ここで深くつつこむと絶対にリーナの機嫌を損ねてしまうので、気にしないふりをしつつ話を元に戻すことにするのが一番だ。

「なんもないならいいや、クッキーくれる？」

「……っ、うん」

ハッとした表情をして、そのあと何事もなかったかのように僕の前にクッキーを突き出すリーナ。

その一連の行動は、見ている分には非常に微笑ましい。

なんてことが頭に浮かびながらも、僕はリーナの手に持たれたクッキーにぱくついた。

サクサク、ごっくん。

……やっぱりここのお菓子はおいしいな。

サクサクの生地と甘すぎない絶妙な加減の甘さ。

ほのかにバニラの風味を醸し出しつつ、ダージリンだろうか、紅茶の味がした。

「今日は紅茶クッキーなの？」

「……」

コクッと頷く無言の肯定。  
心なしか嬉しそうに見えるけど、それは別に悪いことではないの  
で気にはしない。

「リーナ」

「？」

「おいしかったよ、ありがとう」

とりあえず、食べさせてもらったので御礼を言う。

するとリーナは、恥ずかしかったのかみるみる内に顔がまた真っ赤になった。

それをかわいいなーって思いながら見ていると、リーナがふっとこっちを見てくる。

「っ……私も」

「え？」

「……んんっ」

何か言いかけたリーナだったが、僕が問い返した瞬間に勢いよくクッキーを僕の口に押し入れた。

まあおそらくは恥ずかしかったのを誤魔化すためなんだろうけど、リーナさんや、食べ物丁寧扱いましょうね、と思うのはおかしくはないはず。

サクサク、ごつくん。

まあ、いいか。

未だ目の前にはうつすらと顔を赤くしているリーナがいるが、それも久々の日常を思い出させてくれる。

またしばらくは穏やかな日々が続くといいな、と思わせるようなそんな午後だった。

そんな思いは絶対に叶わないような気がするけど。

「あ、報告の時間過ぎてるや」

「……ばか」

## **days. 1 時計塔（後書き）**

文中の事件はプロローグの事件のことだったりします。

……え？ わかってる？

ですよー。

## **days. 2 中る予感? (前書き)**

全然進んでない……。

というか1話の文の量はこれくらいでいいでしょうか?

そして未だに明かされない主人公のこと

何はともあれ、お楽しみください。



## days. 2 中る予感？

「報告は以上です」

「……了解した。下がっていいぞ」

ここは時計塔地下2階にある研究室の一室。

たしか、生物についての研究をしている場所だったと思う。

とはいっても、時計塔で研究する内容がまともなわけではなく、合キ成メラ獣だとか人工の脳を作成したりだとか物騒な内容なのだけど。

もちろん一つにまとまって研究をしているわけではなく、ここからさらに多岐にわたって分野が分かれ、各自相手に干渉をしないようになっているのは暗黙の了解だ。

魔術は秘匿するものの、たとえば仲がいい知り合いにだって普通は自分の魔術の秘を教えたりはしないものだからである。

そしてこの場所は、それ関係の唯一の干渉区域であり、上への報告や依頼のやりとりをする場所として機能している。

ちなみに依頼というのは、あまり高い戦闘能力を持たないものや、表に出たくないもの、ただ面倒というものが研究に必要な材料集めを頼んだり、今回僕が受けた内容依頼のように最近姿を現さなくなったものの搜索、場合によっては隠蔽始末するという仕事もある。

珍しいものになれば、人体実験の道具になってほしいとかいうものもあったり。

誰が好き好んでモルモット死体になるかって話だけど。

とまあ、ずいぶん話が逸れたが、僕がなぜこの場所にいるかと言うと件の依頼についての顛末を報告しに来ているのだ。

といっても、すでに大体の内容はレポートに書き提出しているし、

現場<sup>工房</sup>を検証した魔術師から研究内容や細かいことが伝わっているはずなので、僕が報告するのは現場にて奇妙と思ったことや彼の様子についての詳しいことといった感じだったりする。

ようは書類に偽造<sup>嘘</sup>がないかを確認しているというわけ。

すぐく面倒だけど、これをすっぽかしたりして自分が逆に調べられて始末されるなんてのは御免なので仕方がない。

「失礼しました」

「……」

ここの最高責任者<sup>クライアント</sup>に一礼をする。

彼の意識からはすでに僕ははずされていたようで、すでに机に向かって何かを記していた。

周りには雑多に置かれた魔術書らしきものが散らばっており、彼がかなり大雑把な性格だというのがわかるが、別にどうでもいいのでさっさと研究室から出た。

ガチャ……ぱたん。

「ふう……お疲れ、僕」

そう自分にいいながら大きく息を吸い込む。

地下2階という環境からここの空気は綺麗なわけではないのだが、なぜか美味しく感じられる。

……ああ、あそこ<sup>研究室</sup>の空気が悪かっただけか。

埃だらけ、よくわからない生き物のホルマリン漬けがずらっと連立した棚に並べられ、実験後らしい生き物の腕やらなんやらが置か

れた手術台が置いてある研究室。

もう慣れたものだが、こんな光景を知らなかった当時は来るたびに気分を悪くしていたものだ。

「……染まってるなあ」

仕方のない事実を再確認。

まあとりあえずは、行くか。

コキ、コキ、と首を鳴らしながらとりあえずテラスを目指して歩きはじめる。

テラスというのは、時計塔の表の姿である大英博物館にあるカフェテラスのことだ。

そこでは一般人もいるため、比較的落ち着いた時間を過ごすことが出来る（関係者のピリピリした空気が比較的少ない）ので、僕的には安住の地第三位くらいに考えていたりする。

ちなみに第一位は自分の家で、第二位はさっきまでいた路地裏カフェ（命名自分）だ。

「さて、早くしないと姫リーナさんがもつと拗ねるな」

そんなことを呟き、少し歩みを速める。

少し前まで路地裏カフェでリーナと二人優雅にティータイムと洒落こんでいたわけだけど、報告があることをすっかり忘れていた僕は、まだ食べ終わっていないリーナを置いて一人時計塔へ訪れたのだ。

その際に待ち合わせ場所としてテラスにいてと伝えておいたので、リーナは今テラスにいるということになっているはず、というわけである。

リーナが怒って街中を歩き回っていなければ。  
……歩き回ってないよね？

「……なんか嫌な予感がするな」

人間というのは、なぜか当たって欲しい事柄についてはことごとくはずれ、逆に当たって欲しくないことがよく当たったりする。

確立論なら完全に半々だけど、確立を信じてはいけないのが人生ってもんだと僕は思う。

つまり何が言いたいかというと、僕が感じているこの嫌な予感は——すごく当たりそうってこと。

少しずつ、少しずつ歩く速度が速くなる。

別にリーナの身を心配しているわけではないのだけど、何か嫌な予感がするのだ。

彼女は僕よりも戦闘技術では上だし……てかぶっちゃけ師匠だし、街中の魔術を使えない状況下ではまず負けないだろう。

だが、世の中にはそんなこともお構いなしに暗示使ったりする危険人物とかいるわけで、まあ暗示程度なら絶対に彼女には効かないとは思うけどもしかしたらというのものもある。

何より彼女の姿が一番問題かもしれない。

銀色の髪を腰まで伸ばし、紅い目、整った顔立ち、控えめだけど女性特有な体つき、そして——小学生高学年または中学一年生くらいの姿。

そちらの方面の方々にとってはさぞ良い獲物だろう。

生憎と自分にそんな趣味はないが、友人の一人にリーナを女神扱いしているやつがいるのでその危険性はよくわかる。

……ああ、あれは大変危険なものだ。

思いだしてしまった嫌な光景を頭から追い出す。

が、今感じている嫌な予感とどうしても重ねて考えてしまい、むしろ頭の中にどんどん嫌な光景を量産してしまう。

まさに泥沼に嵌っているという状況だろう。

もし、ここで一人でも彼の知り合いがいればまだ正常な思考で物事を考えることができたかもしれないが、時すでに遅しってやつだ。

やばい……やばい、やばいやばい！

なんか知らないけど本当に嫌な予感がとまらないぞ。

すでに歩くからランクアップし走りだしている。

廊下は走るものではありません。とは言うが、ここ時計塔ではそんな常識は関係ない。

ある程度の規律はあるが、それは魔術の秘匿ということを第一に考えているきまりだ。

一般常識についてなどほぼ触れてなどいない。

ここが日本の学校や、人気が多い場所だったのなら話しは変わってきたのだが。

そうこうとしているうちに、階は地下一階、それも地上階に繋がる唯一の階段まで来た。

ここまで来ればテラスはもう目前である。

タッ、タッ、タタッ！

一段飛ばしで上へと向かう。

途中で知り合いらしき人物に声を掛けられた気もしたが、今はそれどころではないので黙殺する。

タタッ、タッ、……ガタン！？

この時計塔、なぜかわからないが階段の目の前に外に出る扉があったりする。

息を切らしながらも漸く階段を抜け、落ち着く暇もなく扉を力任せに開け放つと。

——ッ!?

「ッ!？ あ、危ないじゃ——」

「!？ ごめんね、急いでるんだ」

開けた瞬間に目の前に人がいたが、それはそれ変人集団。魔術師

目で追えないほどの反射速度ですでに扉から二メートルほど離れていたりするのだ。

それが分かっているため、僕は気にはしないし、今は緊急事態なだけに謝罪もぞんざいにしてしまう。

……まあ後で謝りに行くのだけど。

そしてテラスだが、意外と時計塔を出てすぐ目の前にあったりする。

つまりは、今、扉を出て、ぶつかりそうになった人に軽く目線を向けて、目線を正面に戻せば、そこにはテラスの光景があるわけであって、やはりというか、なんというか……。

「おいおい……ホントに絡まれてるよ」

嫌な予感って言うのは当たってしまうものなんだってことがすぐに頭に浮かんできた。

だがなにせよ、まだ絡まれている段階だ。

未だに走りながらだが、見えているだけで二人……いや、三人か。とにかく、行儀よくテラスにあるイスの一つに座っているリーナにまだ手を出してはいない。

それだけで、少し、本当に少しだが僅かに心に余裕が出来た。

「……? !」

と、どうやらリーナがこっちに気付いたようである。

ティータイムをすでに終えている時間だが、世界有数な博物館<sup>表面</sup>だけあって人の数は多い。

そんななかを走っている人間がいたとしたら、気付かないほうがおかしいのだが。

だが、絡んでいる奴らはこちらに背を向けているために気付かなかったりする。

なんというか……お約束って言葉が浮かぶな。

デートの約束をして、彼氏が少し遅れてくる。すると、待ち合わせ場所にいる彼女がナンパされているというありふれた景色が浮かぶ。

まあ、条件や状況が違うとはいえ、待ち合わせをして相手が絡まれているのだからそれほどの違いはない、だろう。

「って、あほか。そんなこと考えてる場合じゃー! ?」

場合じゃなくなった。

お約束なんて考えたからかもしれない。

目の前では今にも絡んでいる内の一人がリーナの腕をつかもうと

している。

これは、まずい。

非常にまずい。

何がまずいって、このままじゃあの男が投げられることがまずい！

リーナが、そっち系の人が苦手なのは確かだが（当たり前だろうけど）、もとより、男性事態をあまり好きでなかったりする。

とくに体に触れられることを嫌っており、知り合いの男性でさえよほどのことがなければ許しはしない。

そんなものだから、知り合いでもない男性が触れればそれはそれは愉快なことになる。

主にキレたリーナの手によって。

先の友人も、初めてあったときにいきなり手を握って酷いことになっていた。

あれは……嫌な事件だったな。

なんて、頭の中では比較的どうでもいいことが浮かんでゆつくり時間がゆつくりと進むように感じるが、現実はそんなことはない。

今まさに、男の手が、リーナの腕に近づき、そして――

「ま、待て！！　おい、そこのやつリーナに触れ――」

「――止まりなさい下衆」

一人の女性が割り込んだ。



## **days. 2 中る予感? (後書き)**

主人公の問題の友人は所謂ロリk (ry

さて、最後に現れた女性は一体!?

まあ、わかつちやう気がしますけどね。

感想、指摘、ありましたら気軽に書いてくださいね！。

### **days. 3 一姫の逆隣（前書き）**

いやはや、めちゃくちゃ更新遅くなってしまい申し訳がないです。  
個人的に忙しかったのが原因なんですけど、許してもらえればうれ  
しいですね。

## days. 3 一姫の逆隣

『――止まりなさい下衆』

今まさに声を出そうと思っていたところに、いきなり女性の声が響き渡った。

まるで謀ったかのようなタイミング、周りの客たちも何事かとリーナたちと声をあげた女性のほうを見ている。

少ないとはいえ、そこは野外のテラス。

客以外の人も視線を向けているので、それはちょっとした騒ぎになりかけていた。

これで男達も引いてくれるだろう、なんて考えたのだが不意に掛けられた言葉が頭にきたのか少々キレ気味で辺りを見回している。

とはいっても、そんな状況になればたとえ自分たちが声を掛けているのが少女――な外見――と、邪魔をしてきたのが女性一人であれ不利になるのは男達である。

すでに周りでは客たちが、あんな少女に寄ってたかって3人で、最低ね、女の敵だわ、とひそひそと声をあげている。

ちなみに、ひそひそと男達を非難する声をあげているのはほぼ全員が女性客であり、男性客はというとりーナと声を掛けた女性に目が釘付けになっていたりする。

片や身内という鼻根目抜きに見ても美少女に入るであろうリーナ、片やここから見ても綺麗な人物だとわかる、というか、よく見れば知り合いだった。

「……ルヴィアさんじゃないか」

——ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。

魔術の名門貴族、エーデルフェルト家の現党首。

時計塔では、今期の主席候補と言われている。

性格はとても穏やかであり、物腰優雅、白鳥のような美貌に気品溢れる言葉遣い。

まさに非の打ちどころのないお嬢様である。

が、それは何層も何層も重ねて被っている猫かぶりであり、実はとても負けず嫌いで潔癖症という本性を隠していたりするのだが。

なんでそんなことを知っているんだ、って言われると、それはいろいろとあったからとしか言えない。

僕とリーナ、ルヴィアさんが出会って間もないころに一悶着あったってことで察してほしい。

というか、もしそのことを考えていることがルヴィアさんにばれた時点で終わりだ。

つまりはその……察してください。

「と、そんなことを考えてる場合じゃないか」

一つ呟き、気持ちを目の前の騒ぎに戻す。

よくよく考えてみれば、今は自分が介入するチャンスだ。

リーナを囲っている男達の意識は完全にルヴィアさんの方へ向いているし、周りの客だって僕なんか気にも留めてはいない。

……いやまあ、最初から僕なんて誰の目にも入ってないだろうけど。

なんて思うが、そんな思考に陥っている場合じゃないか。

状況を確認しよう。

リーナを囲っている男達は三人。僕に丁度背を向ける形をとって

いる。

そしてその向こうにはルヴィアさん。まだ僕には気づいていないように見えるが、彼女に至ってはわざとそんなそぶりを見せているかもしれないので判断はしづらい。

さらにはリーナ。身長が低い所為で姿がよくは見えないが、囲まれている隙間から見える感じ、ルヴィアさんの方を向いているようだ。

『……ん』

と、思ったら、ちらちらとこちらの方を見ていた。

さっき僕に気付いていたのだから当たり前といえど当たり前なのだが、僕としては是非ともやめてほしいなー。

男三人は別に気にしないだろうけど、ルヴィアさんが僕に気付いてしまうかもしれない。

気付かれたからどうしたってわけでもないんだけど、確実に穏便に事が済まなくなってしまうだろうし、確定でそこに巻き込まれるのは少し遠慮したい。

だけどもあ、神様ってのはやっぱり意地悪なようで。

『――！ ふふ』

「う……はあ」

リーナの視線を辿り、僕の場所へと目を向けて微笑むルヴィアさんがいた。

いや、微笑むなんて言い方は当てはまらない。あれは絶対にイイものを見つけたという加虐的な笑い方だ。

それでさえも上品に見えるのだからさすがお嬢様という感じだが。

ともあれ、見つかってしまったからには仕方がない。

とても素敵なお嬢様であるルヴィアさんだけど、割と喧嘩っぱや  
いところがある。

さらにはプロレスがとても、とても、とても好きならしく、好  
きすぎて自分もプロレス技を扱えるぐらいだ。

ああいう軟派な手合いは嫌いと言ったことがあるし、十中八九物  
理的に制裁を加えることだろう。

そしてそれに巻き込まれるのは僕だ。

リーナがキレないうちに穏便に済ませようと考えていたところが懐  
かしい。

……数分、いや数秒前かもしれないけど。

腕っ節には自信がないけど、それは勇気と諦めでカバーすること  
にしよう。

もはや諦めの境地に至った僕には怖いものなんて少ししかない。

もちろん怖いのはルヴィアさんとリーナだけだね。

……どうせへたれですよ。

『おい！ その女ア、いきなり何言ってるわけ？』

『何と言われましても、私は正しい名称で貴方達を呼んだはずで  
すが？』

『あ？ なんだと？』

僕がこれからの身の振り方に頭を悩ませていると、向こうのほう  
では話しが進展していた。

というか、ルヴィアさんが真っ直ぐな心根の持ち主なのはわかるけども、こういう場合はもう少し包み込んだ言い方ってものをしてほしいと思う。

どう見たって男達の空気が尋常じゃなくなってるよ。

やる気満々、いや、殺る気満々って感じだし。

でも悲しいかな、ルヴィアさんを知っている身としては男達が哀れに見えてしかたがない。

まあリーナに手を出そうとしていたんだから同情の余地はないけど。

『……いい加減うざい』

『おい、ガキてめー』

あ、やばい。止めないと。

『——ガキ、ですって？』

——え、ってッ!？』

——逆隣に触れる。

ひとりがリーナに対する禁句を口走ってしまった。

そしてその瞬間、リーナに投げ飛ばされていた。

それはもう鮮やかに投げられていた。

ここまで綺麗に投げが決まることもそうそうないであろうってくらいに。

禁句を言ってしまったから仕方ないとは思うし、もともとルヴィアさん曰く下衆だから問題はないけど、一度暴走したリーナを落착させるのは至難の業だったりする。

『ふふ、次は——貴方ね?』

『ひっ!? や、やめ、ガハアッ』

前に一度僕も言ってしまったことがあるのだが、その時は……やめよう、あれは思い出してはいけない記憶だ。

とりあえず落ち着かせるのは、褒め殺し十献上品しかないだろう。

『あはは、最後はアナタよ?』

『ッ、わ、悪かった嬢ちゃ、ゴハッ』

『何か言ったかしら?』

『あああ…ッ』

『……あは?』

何やら後ろを向いている間に——人それを現実逃避と言う——すべてに片がついたようだ。

きっと途中で聞こえた、なんか硬いものが折れるような音とか、外れてはいけないものが外れるような音は気のせいに違いない。気のせいと思いたい。

「……ねえ? マキも心の中では私の事がキだとか考えてるの?」



訂正。

まだ厄介事は始まったばかりのようだった。

ぎ、ぎ、ぎ、ぎ…なんて音が鳴るような錆びた人形のように後ろを振り返ると、大変素晴らしい笑顔なリーナがいた。

あ、その少し後ろでルヴィアさんがぽかんとしてる。

ルヴィアさんのフォローもいるみたいだ。

「ねえマキ？　もしかして今、違う女のことカンガエテルノ？」

でもまあ、とりあえずは…：目の前の恐怖と対峙しようか。

### **days. 3 一姫の逆隣（後書き）**

うーむ、最後の方はかなり強引すぎたでしょうか。  
ああ、もっと上手く文章書けるようになりたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1836o/>

---

日のあたる世界の中で

2011年10月9日23時45分発行